タウンスケープ 77' 海野宿（北国街道にのこる宿場の景観）

吉田　襄*

Townscape Architecture at Moto-Unno, Nagano District, Japan

*By Yuzuru Yoshida**

1. 位　　置

海野宿は，北国街道の宿駅として寛永２年（1625年）に開設された。現在，海野宿は，本海野と呼ばれ，長野県小県郡東部町に所属し，千曲川の河岸段丘上に展開する集落で，宿場の景観を現在もよくとどめている。

集落の北側を国道18号線，国鉄信越線が走っており，同線田中駅から２km 足らずの所に位置している。

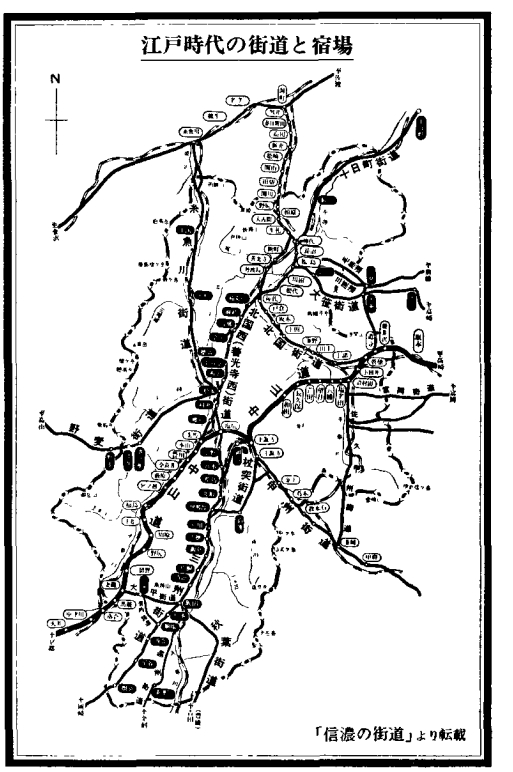
中仙道追分宿，分去（ワカソナレ）にはじまる北国街道は，小諸，田中，海野と進み，上田，坂木（現坂城町），善光寺（現長野市）から野尻，高田を経て，潟町（現上越市）に至り，北陸街道に連絡する全長35里（140km）の街道で，別に篠ノ井より分かれて，松本を経由し，洗馬に至り，中仙道に合する 68km の北国西街道がある。

北国街道は，北陸往還又は加賀街道とも呼ばれ，加賀前田候をはじめとする北陸諸大名の参勤交代，佐渡の金銀荷物，管理のための幕府役人の往来，物納の貢租品，生産物資の輸送等で交通はすこぶる頻繁であり，各宿駅の賑わいもかなりであったと伝えられる。

2. 海野宿の成立と経緯

海野宿は当初，隣接の田中宿の補助的な宿駅として開設された。田中宿は，慶長年間，北国街道が定められた時，宿駅として設定されており，海野宿とは 2km 足らずの近さである。この様に田中宿に接近して海野宿が設けられたのは，海野が中世以来，豪族海野氏の居館の城下としてこの地域の中心となり，月５回も市がたっていた事や，中島の渡しを介して依田窪の出口となっていた事，上田小諸両城下町の中間の地点であるなど，歴史的地理的諸条件等がそうさせたものと思われる。中世の小県郡内に起った地方豪族は他田氏，滋野氏，海野氏，禰津氏，依田氏，丸子氏，塩田氏，長瀬氏，真田氏等があり，海野氏，真田氏は滋野氏の流れを汲むものである。真田氏は後に上田城を築き，上田の城下町を整備することになる。上田城下町を作るに当り，真田氏は古くから縁の深かった近郊の集落に呼びかけ，町を作らせている。今日の上田市の中心の一つをなしている海野町は，当時海野宿の人々が招かれて作ったものであり，現在の海野は本海野と呼ばれている。

海野に宿駅を開設するに当り，当初宿役は田中宿が月の前半，海野宿が後半を勤める事となり，常置の人馬は，毎日25人，25疋として，不足の場合は助郷の村より集める事とし，当初は田中宿が本宿で，海野には本陣はなく，問屋の役割りのみを行なっていたが，寛保２年(1742年)の満水で田中宿が流出し，宿場としての機能を失なったため，海野宿が本宿となり，田中宿にとって代わった。江戸時代中期には，願い出て飯盛女を置く事が認められ



* 建築学科　教授
Professor, Architectural Division.

ている。この事は現在海野宿に残っている表構えの出格子の建物の造り等からも察する事が出来る。

海野宿は，東西に走る北国街道に沿って本海野６丁，(約650m)，その西側に，海野新田（現在の西海野）６丁(650 m) が続いている。本海野，海野新田共に，その宿場の両端に石畳の枡形があり，道は折曲って宿場へ出入し，街路の中央に用水を通じていた。かつてこの街路の両側には，地割りを持った伝馬屋敷が63戸（本陣１戸，問屋１戸，庄屋２戸を含む)，が並んでいた。地割りは間口12間（約21.8m）から４間（7.3m）迄，奥行きは大体25間（45.5m）であった。

海野新田は元和４年（1618年)，古新田の地に近郷の者が出たが，寛永８年（1631年）この地が満水で流出したため現在の地へ移ったもので，ここは江戸へのくれ木や御城米等の貨物駅であった。

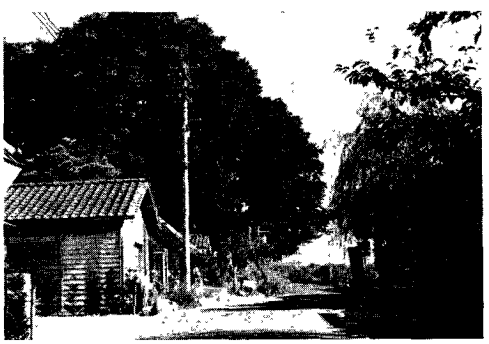
明治21年（1888年）信越線の開通によって，中仙道，北国街道の宿場はその機能を失なった。海野宿も当然の事ながらその影響を強く受け，本陣，脇本陣は衰微し，建物の大部分を消失した。一方，明治７年頃より，この地において岩倉具視の影響により，養蚕業が行われつつあり，以後，特に信越線開通後は，宿場の客室を利用して養蚕，蚕種に転向し，昭和30年頃迄，海野は養蚕一色の感があった。転向後の資金の畜積等により，また元来，生活程度が高かった事などもあって，在来の建物の修理保存も比較的よく行われ，蚕室に改造されたものやその後造られた建物等も，元の宿場の雰囲気に調和したものとなっていて，現在に至るも宿場風をよく残している。昭和48年３月，交通の遺構として所在地東部町の指定文化財となり保存の努力がなされている。

3. 集落の概要

田中宿（現在の信越線田中駅附近の集落）を抜けた北国街道は，巾約５m 内外の，舗装された道となっているが，位置や自然の景観は当時とそれ程変わっていない様で，千曲川の河岸段丘上を西に向って進む。道は信越線の踏切を越す辺りで南側に大きく曲がると間もなく白鳥神社の大きな欅が見えて来る。道は更に千曲川につき当り，神社を右に見て西へ大きく廻り込むと海野宿の入口である。この附近は東端の枡形のあった所で，明治初年，石畳は撤去されてすでにないが，道の屈曲はそのまま残っている。この地点から西に向って６丁（約650m)，街道沿いに街並みが展開する。

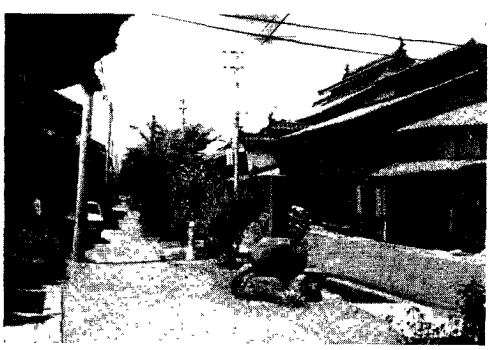
集落内の街道の巾員は約10m内外で，東西にほぼ直線状に走って居り，道の中央に用水の流れがあり，これに沿って樹木や草花が植えられている。流れの水は北の烏帽子岳から流れ出て集落内を流れ，千曲川へ落ちる。流れによって二分された街道は，現在，北側は舗装した車道となって居り，南側は未舗装で歩道，パーキングスペ

集落の景観
ー東より西へ向ってー



① 白鳥神社附近桝形のあった所

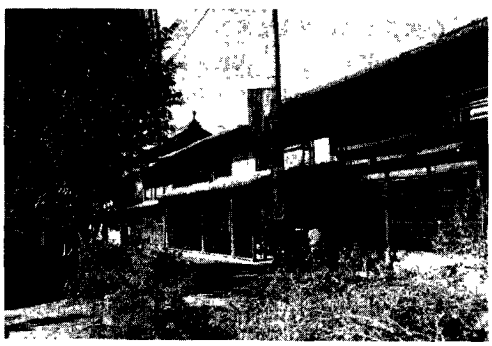
格子とうだつ ②



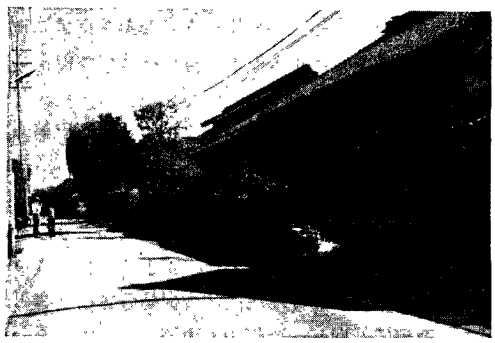
記念碑と消火栓 ③

本うだつのある家 ④

用水と木立 ⑤



馬留めのある家 ⑥



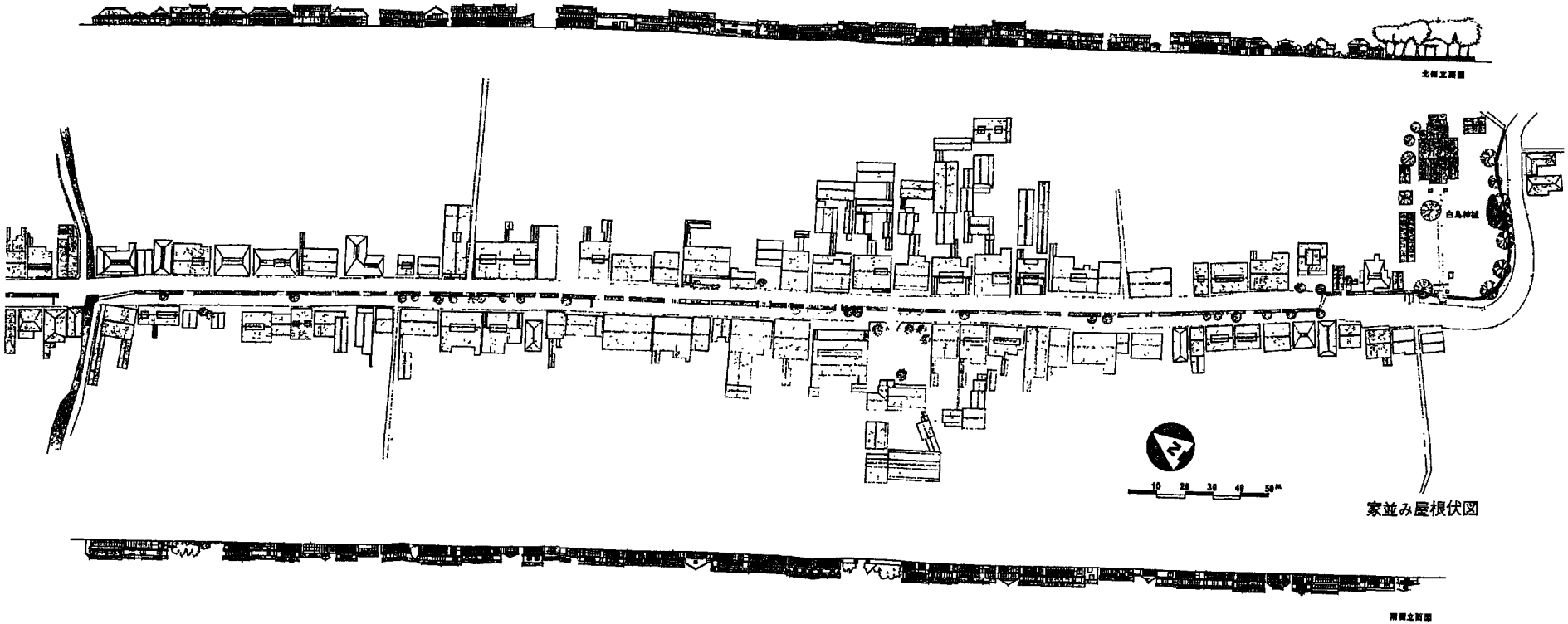
用水・橋・木立・草花 ⑦

北側から街道へ入る路 ⑧

石橋・消火栓・半鐘 ⑨

本海野西端附近 ⑩

うだつ・土蔵造りの家 ⑪



家並み屋根伏図

（図版は原書参照）

ース，子供達の遊び場等多目的に利用されている。

街道の両側には95棟の民家が建ち並び，このうち60%の55棟は宿場時代の建物である。更にそのうち25棟は2階建てであり，7棟は出梁造りである。明治以後新築された40棟の大部分は明治期のものであって，養蚕のため，棟に煙抜きの小屋根を設けたものが多い。

集落の中央部分には，比較的古い家や堂々たる2階建てが多く，出梁造り，うだつを上げ，上下階の開口部に格子(海野格子と呼んでいる)をはめ，板葺き石置き屋根を瓦葺きに改めた勾配のゆるい切妻屋根をもつ江戸期の旅籠屋風そのままのものや，煙抜きのついた塗り込めの，勾配のきつい屋根，軒の高い養蚕に使われた家等がある。

本陣は長屋門の一部を残すのみで建築の遺構はないが庭園の樹木や石組み等に当時の風格をしのぶ事が出来る。脇本陣は，一つは大正時代に改築され，一つは徹去された。

宿場のはづれの部分には草葺きの平家が多く，これらは農家の間取りをもったものであり，これも当時の風格を残していて，全体で26棟が残っていた。これらの一部は，取こわされたり改築されたりして新しい住宅に造り替えられている。現存する草葺きの民家も一部はカラー鉄板のおおいがかけられている。

海野宿は，地形的には平担であり，形態的にも単純明解で，視野限界の変化や景観の多様性に乏しく，その意味での面白さは少ない。しかし，集落全体にただよう格調，視覚的ヴォキャブラリイの統一，密度の高さ（デザイン密度）等の結果としての集落の景観は，優れたものの一つといえるであろう。

4. 集落の構成要素

4-1 道（道・用水・樹木）

すでに述べた如く，集落内の街道は直線的に東西に走って居り，巾員は狭い部分で9m，広い部分で12m程度で，大部分は10m内外である。この街道に直角に入る小道（南北方向に走る）が北側に4本，南側に4本あるが，これらの小道はすべて街道とT字型に交わり，南北に横断するものはない。小道の巾員は非常にせまく，広いもので2.5m，狭いものは1.5m程度である。この道は地割の裏側（街道の南北側に通るもの）を結ぶ道に通じて居り，宿場時代には，枡形に設けられた木戸が閉られた際，集落への出入りに使用された他，日常，農地へ行くためのサービス道路として利用していたものである。

街道の中央を流れる用水は，宿場時代，生活用水，防火用水として広く利用されたものであるが，上下水道が普及した現在，生活用水としてはほとんど使われていないが，現在も流量は適当にあり，水もきれいで，集落内を流れた後，南側の田へ入り農業用水となって，千曲川へ入る様である。したがって用水は，現在では集落の景観と道路機能の分離のみに役立っているに過ぎない。

用水に二分された道は，宿場時代北側は人馬往来用，南側は籠や荷物の置場や馬留(ツナ)ぎ等多目的に利用されたが，現代に於ても，その機能分けは踏襲されている。南側の道には，用水に沿って柳，桜，青桐，荻，楓等が植えてあり，又，樹々の間には季節の草花があり，道は木陰のある楽しい空間となり得ている。特に柳や荻等は建物群と調和して宿場らしい雰囲気をかもし出している。

又，この道には，記念碑や消火栓，半鐘等が設置されて居り，多目的に利用されている。

用水には30あまりの石橋と近年作られたコンクリートの橋がかけられ居り，石橋の内二つは欄干付である。コンクリート橋は，主に自動車を利用する様になって架けられたものが多い様で石橋に比べて巾員も広く，場所によっては流れのほとんどが蓋をされている個所も見うけられる。

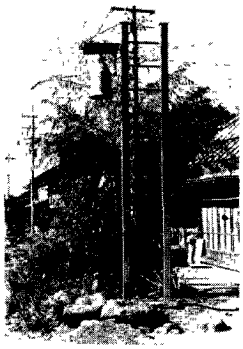
用水の縁(フチ)は玉石積みの土留めになって居り，一部は切り下げて洗い場となっていたが現在では埋められている。

屋敷の地割りと道の境界は切出した縁(フチ)石を並べ，正確に境界が分けられている。

現在，国道18号線が混雑するため，この北国街道がバイパスに利用され，車の往来が激しく，集落にとって必らずしも良好な状況とはいえないが，10m巾員の道と両側の2階建の建物，中央の水路と街路樹(高さ5～6m)

道・用水・樹木等
① 用水と道—右側か道路
② 用水にある洗い場の跡
③ 柳と石橋
④ 石橋—2
⑤ 〃〃—3—自然石のもの

消火栓



半鐘

の作り出す相互関係は，機能的にも視覚的にも調和のとれた美しいものとなり得ている。

4-2　町並み，家

本海野における地割りは，各敷地共間口（街道筋東西方向）に比して奥行き（南北方向）が深く，家敷内部には母家の他に何棟か，附属屋をもっているものが多い。母家は街道に面して建っているものがほとんどであるが，一部の家は長屋門があり，庭を介して母家が奥にあるものや，街道に面した前庭をもつ家も見られる。

街道に面した家の多くは切妻平入りで，各家は近接して建って居り，隣接する建物の壁が全く密着している場合もある。(共有の壁というわけではない)。したがって街道からの景観は，家並みの正面立面（一部屋根上の突出部も見える場合もある）のみとなり，背後の庭や附属屋はほとんど見ることは出来ない。

敷地内は全体がコートハウス的な扱い方で建物が配置されて居り，街道面にある正面の通り土間から入る事が出来るが，サービス通路としての地割り裏側の通路からも出入り出来たのである。

各建物の出入口は平面構成上（土間の位置が家の片側に位置する関係上）正面から見て左右の片側に寄る事になるが，集落内に見られる建物は，出入口は大部分の家が白鳥神社側にとられている。即ち，街道北側の建物は，道側より見て家の右側に，南側の建物は左側に出入口を設けている。

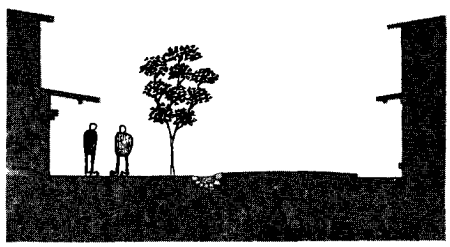
すでにのべた様に，本海野は発生以来，長い年月を経て来て居り，集落のもつ性格も時代と共に変化して来た。

そして建物も，機能，技術，形態等の面で，その時代の生活に最も適したものが建てられ，又，先の時代に建った建物も，時代の変遷に伴ない，遂次生活に合致したものに改造され，今日に至っている。

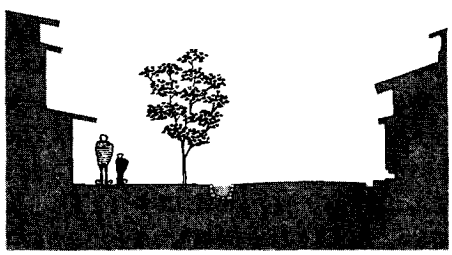
今日，本海野の町並みを構成する家々も，その様な意味でいくつかの特徴をもった群に分ける事が出来る。

1)　宿場時代，旅籠屋として使われた建物

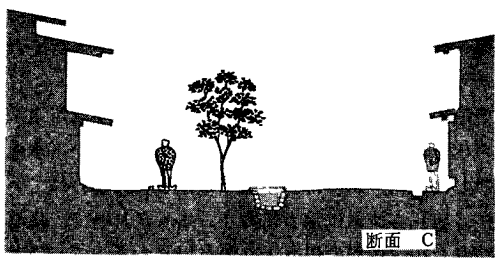
本海野における古い方に属するのは宿場時代の建物のうち旅籠屋の形式をもった建物で，集落の中央部分に多く残っているものである。その多くは内部が改造され，当時のままのものはないが，外観は，屋根材が大正時代，板葺き石置き屋根が瓦葺きに変わった程度で，他は比較的良く原形を保っている。これらの建物は，階高，軒高，棟高が比較的低く，屋根勾配もゆるやかで道面の開口部は多く，壁面は非常に少ない。平面的には通り抜けの土間を持ち，道面の座敷の前には縁側があり，一本引きの格子戸がはめられている。2階部分の開口部は出窓となって居り，格子がはめられているもの（出格子）と，出窓がなく障子雨戸のみで格子のないものもある。これらの建物のうち7棟は出梁造りであり，出梁造りの梁の木鼻や持送り板には，刳り形や彫物等が施されているものも見られる。又，一部の建物にはうだつが見られる。うだつは火廻しなどとも呼ばれ，本来，延焼防止の防火壁の機能であったものであるが，建物の風格を表現する装飾的な性格も併せもっている。本海野の建物におけるうだつも防火的性格の強いものと装飾性の強いものの二つ



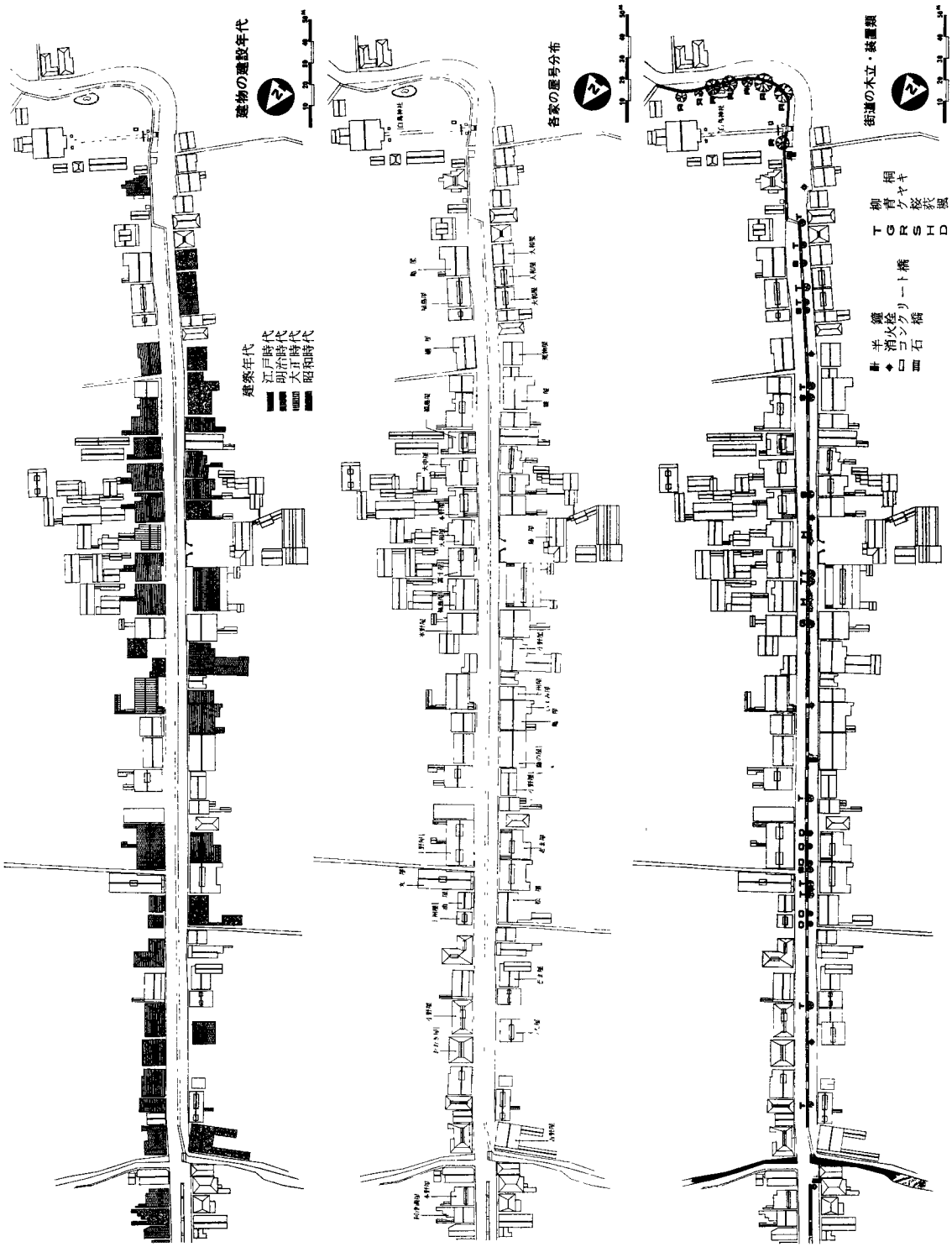
断面　A

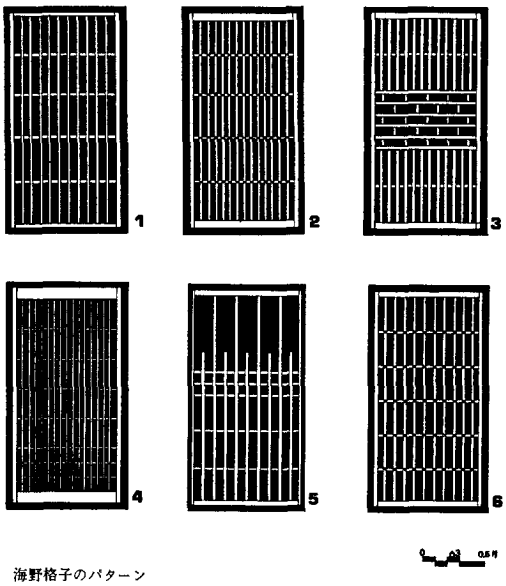


断面　B

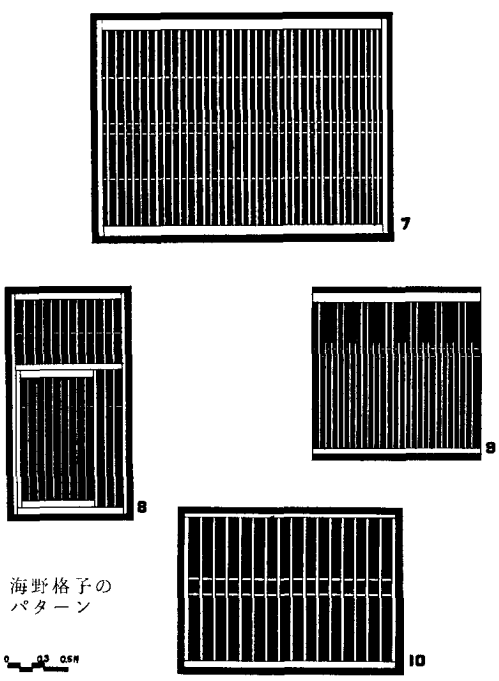


断面　C


建物の建設年代
建築年代
江戸時代
明治時代
大正時代
昭和時代
各家の屋号分布
街道の木立・装置類
柳
桐
青
ケヤキ
桜
萩
風
T
G
R
S
H
D
鐘
半
消火栓
コンクリート橋
石橋



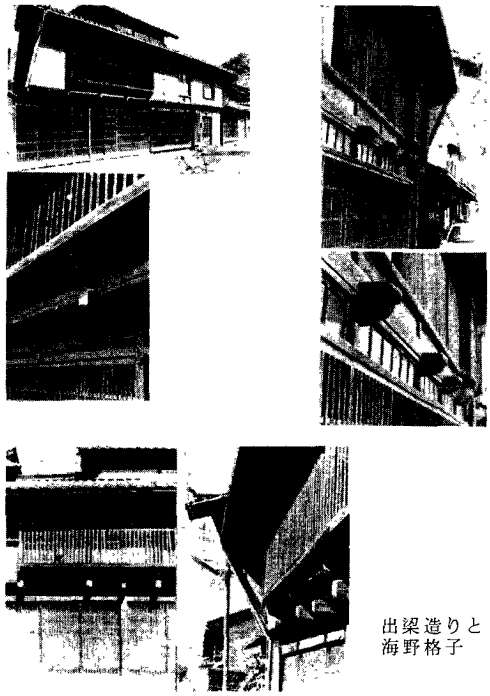
海野格子のパターン



海野格子の
パターン

を見ることが出来る。

出格子のないものは造りも全体に地味で棟高，軒高等もやや低く，客商売以外の町家だったのではあるまいか。これらの格子を，この地では特に海野格子と呼んで居り，この時代の建物に限らず，各時代の建物にも共通して広く用いられて居り，それが，集落全体の重要な共通の，



出梁造りと
海野格子

構成要素となっているのである。

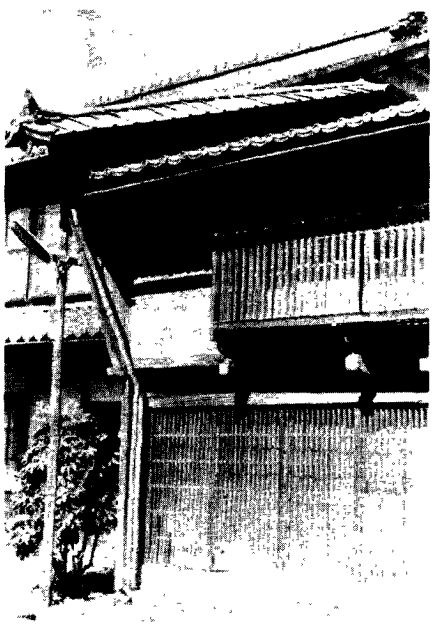
旅籠屋風の建物のうち1階の縁側の格子の外に下屋をつけ，柱をたてて，馬留(ツナ)ぎのスペースを設けた家が1軒残っている。縁側の外には沓脱ぎ石（切り出した四角い石）が置かれている。この石は，この種の建物のみならず，本海野の各時代のものにも共通して用いられているもので格子と同様町並み景観を構成する要素の一つとなっている。

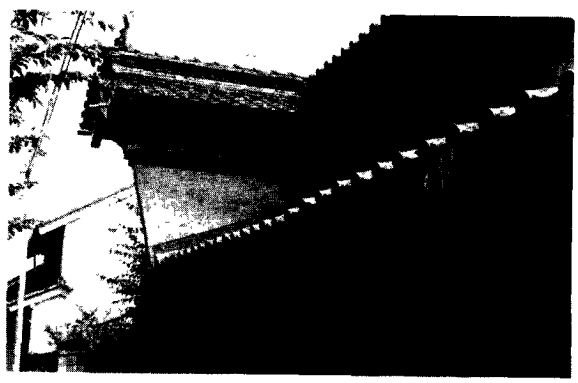
2)　農家風の建物

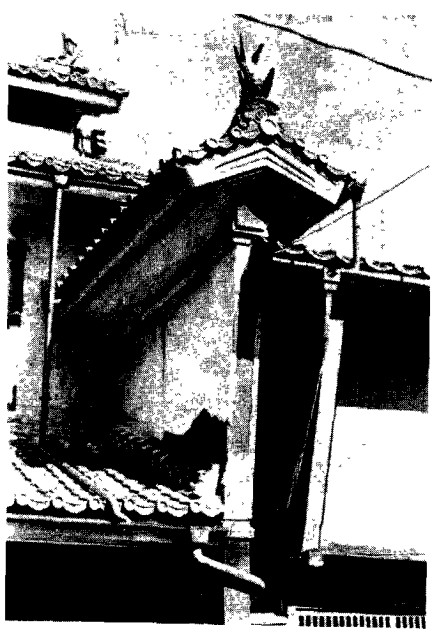
1)と同時代頃に建てられたものであるが，平面，断面立面共に農家の造りで，集落の東西両端に多く見られたが特に北側の西端にまとまって現存している。いづれも平家寄せ棟で棟の部分の勾配が急で入母屋風の草葺き又は茅葺きであった。現存するもののほとんどは，屋根にカラー鉄板でカバーがかけられている。大部分は平入りであるが妻入りのものも二三見られる。農家風の造りではあるが正面開口部には海野格子がはめられている。

3)　養蚕，蚕種業時代の建物

明治時代になり，本海野が宿場から養蚕業に転向した時期以降に建てられた建物で，1階は住居として使用され，2階は養蚕，蚕種の蚕室又は作業スペースとして使用するべく設計されたもので架構が全体に太く大きく，階高が高く，屋根の勾配も急で，全体に大きい建物である。特に2階の階高が高いものが多く，屋根上に煙抜きの小屋根がついているのが特徴である。1階の開口部や







うだつの色々

建物の平入・妻入区分
平入りの建物
妻入りの建物
海野格子とウダツの位置
海野格子のある家
ウダツのある家
屋根葺き材料区分
日本瓦葺き
亜鉛波板葺き
茅又は藁葺き

出入口廻りのあつかいは，他の民家と変らないが，2階部分の開口は小さく，外壁も大壁の塗込め式のものが多い。2階は雨戸のみで格子はないものが多い。これらの建物のうちいくつかは造りや形状が豪華で，欅造りのものや土蔵造りでうだつのついたものや，棟飾りに鬼瓦等を乗せたものが見られ，当地における養蚕業最盛期の，経済的なゆとりの程を見る事が出来る。又，この様な母家の造りの他，各地割り内部に建つ附属屋にこの形式で作られているものが多く，養蚕業のありし日の姿がしのばれる。

4) その他の建物

1)〜3) 以外の目的（一般的なすまいとしての住居）で建てられる現在の住宅は，内容的にも形態的にも従来のものにとられないものが建ちはじめているが，新しく建てられたもののうちの幾棟かは，本海野の景観的統一感を意識したと見られるものがある。それらは規模や大きさはちがうが，形態や建築材料を在来の建物と同じものとし，不連続にならない様な配慮が見られる。反面，コンクリートブロックや，波型着色トタン板，アルミサッシュ等を在来の建物に使用した所もあり，集落全体の中で，部分的にはかなり違和感の生じている個所もある。

ともあれ，建設年代や，目的，形態の異なる家々によって構成される本海野は，全体的には，先にのべた様な格調や統一感，密度の高さにおいて優れたものをもつ集落の一つであるといえよう。

この様な状況は，伝統的な町並みにおいては，洋の東西を問わず，世界の各地に見る事が出来る。この種の統一感や格調は，各種要因の関連の結果もたらされるものであるが，本海野における場合，次のものと考えられる。

① 構成素材の統一

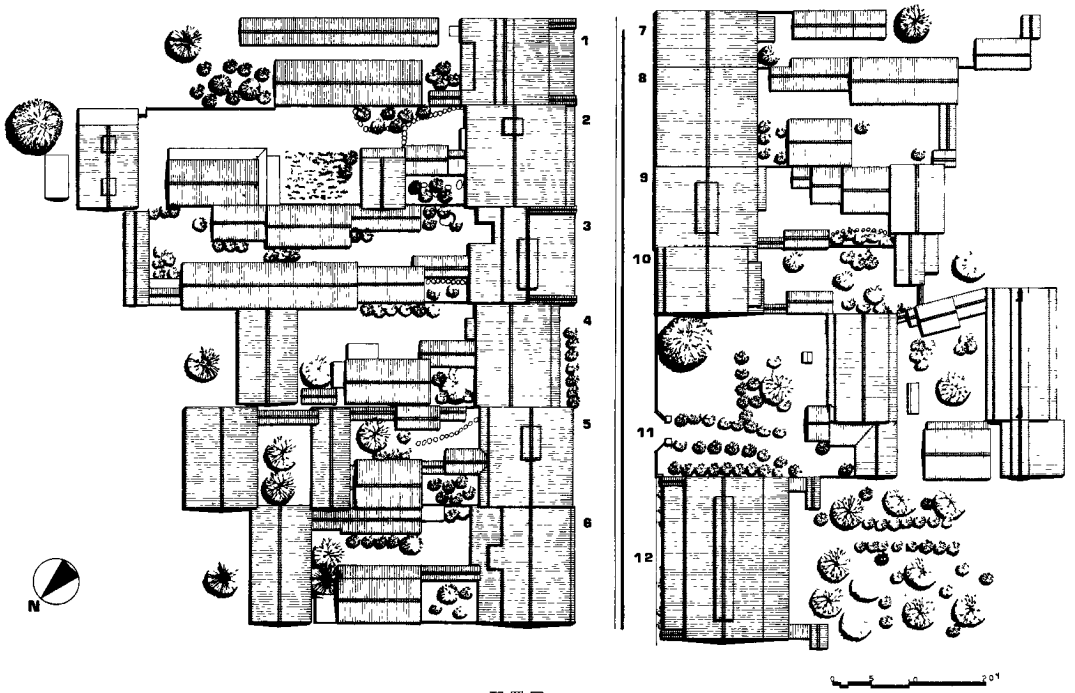
本海野の場合，日本における他の伝統的な集落と同様に，建築材料の種類と使い方の統一から来るもの。即ち屋根材料，壁体の材質と色彩（ほとんどが土壁及びしっくい），開口部構成材の材質及び建築の各部構成材の質感と色彩，

② デザイン—ヴォキャブラリーの統一

建物のファサード（街道の景観の主要要素）を構成する各要素相互の秩序。建物全体のモデュール。煙抜き屋根の形状，大きさ，デイテール。海野格子のデザインとモデュールの統一。建物の足元廻りのまとめの方法。出入口廻りの扱い方。うだつのデザインとモデュール。等々。

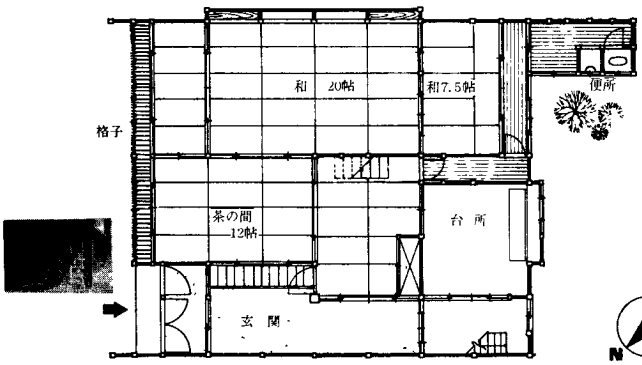
③ スケール感の問題

各建物の高さや大きさ，屋根勾配等寸法的なちがいはあるが，各部デイテールの扱い方や製作の密度。宿場を往来する人や馬など，寸法的のみならず，エネルギーや

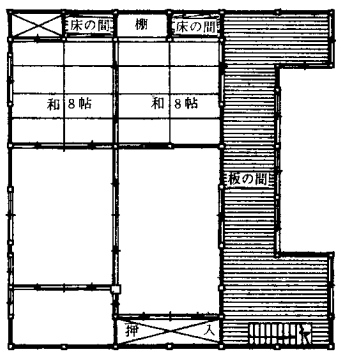


配置図
SITE PLAN 1-12

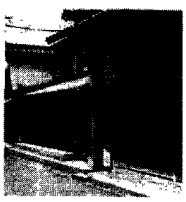
PLAN 1

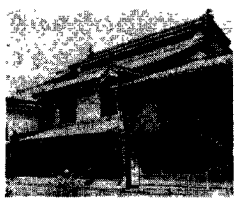


1F



2F

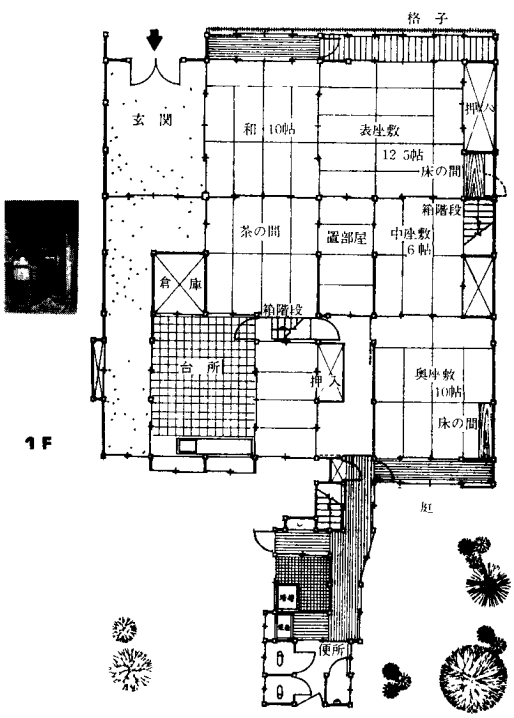




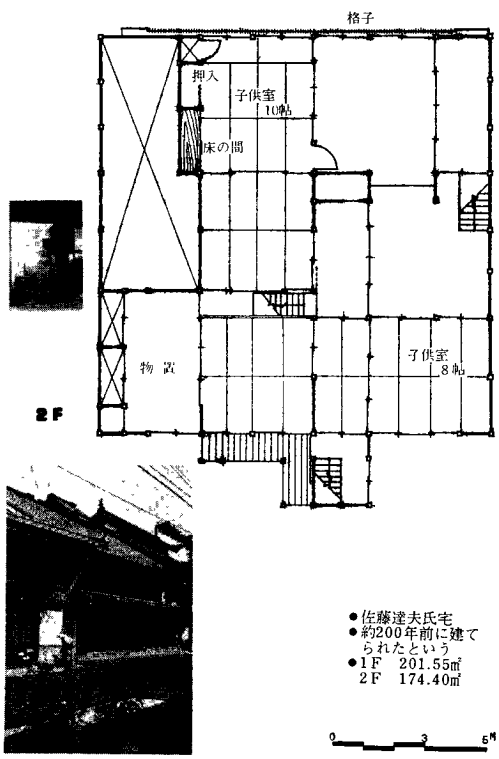
●矢島敬五氏宅
●建設年明治20年うだつのある塗込めの建物
●1F　155.48㎡
　2F　109.50㎡

0　3　5M

PLAN 2



1F

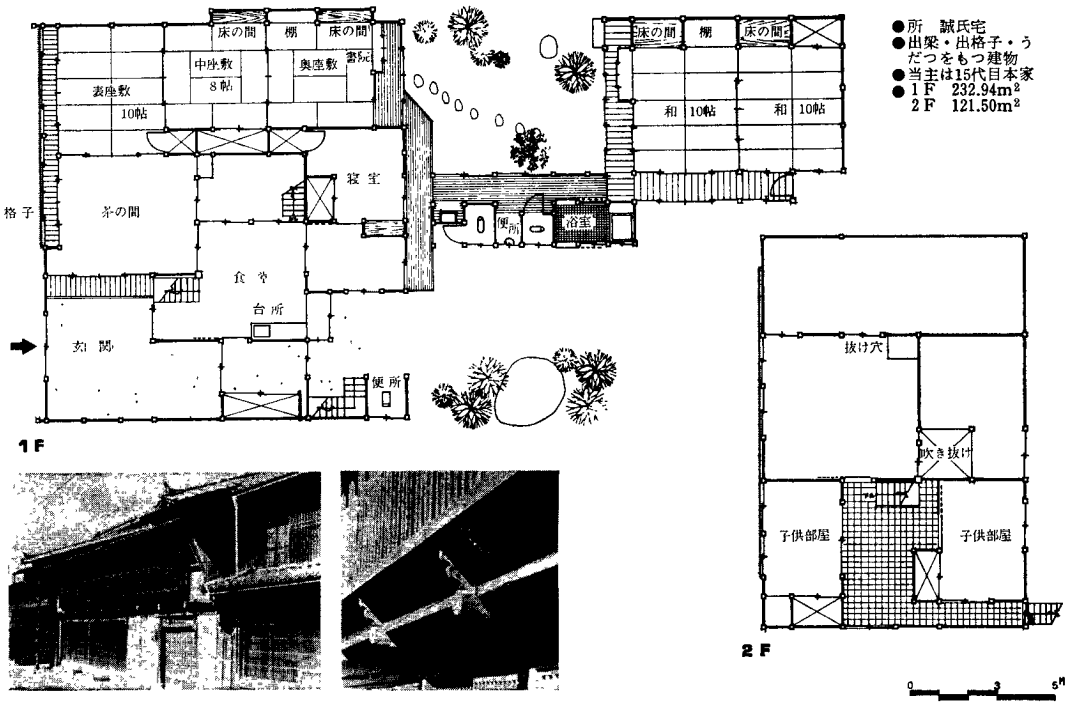


2F

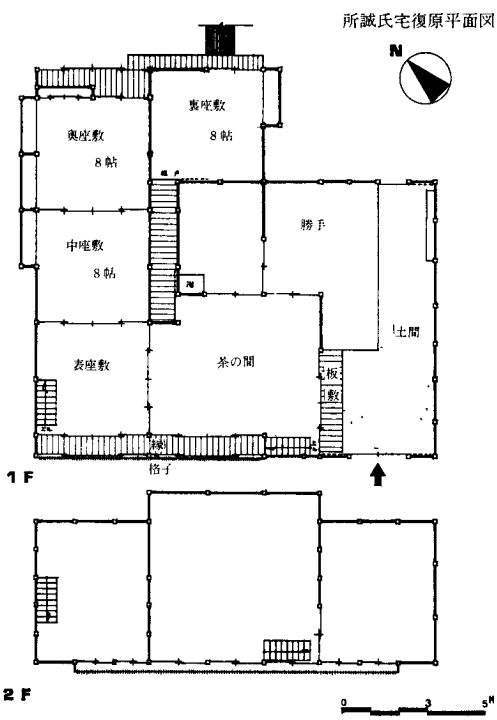
●佐藤達夫氏宅
●約200年前に建てられたという
●1F　201.55㎡
　2F　174.40㎡

0　3　5M

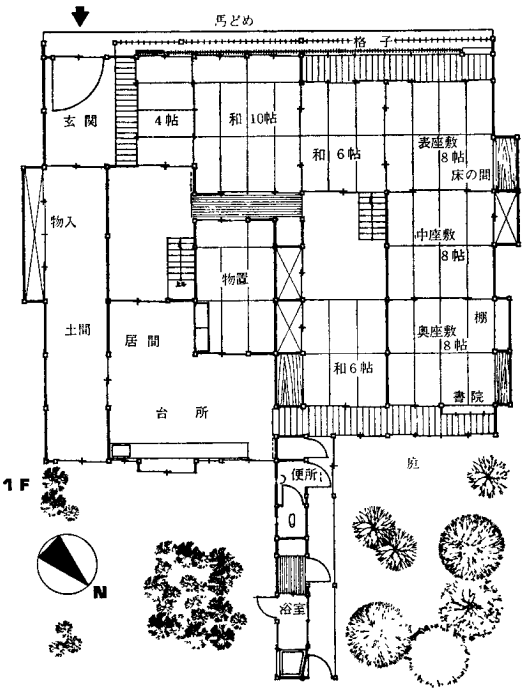
PLAN 3

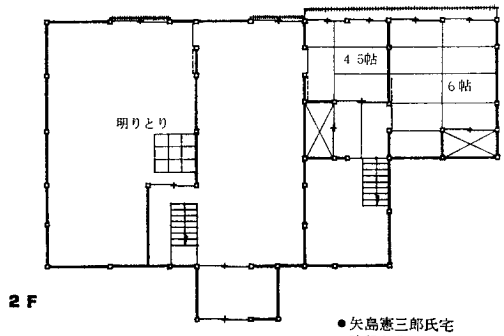


所誠氏宅復原平面図

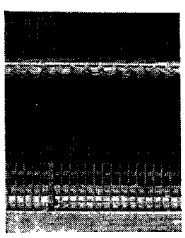


PLAN 6

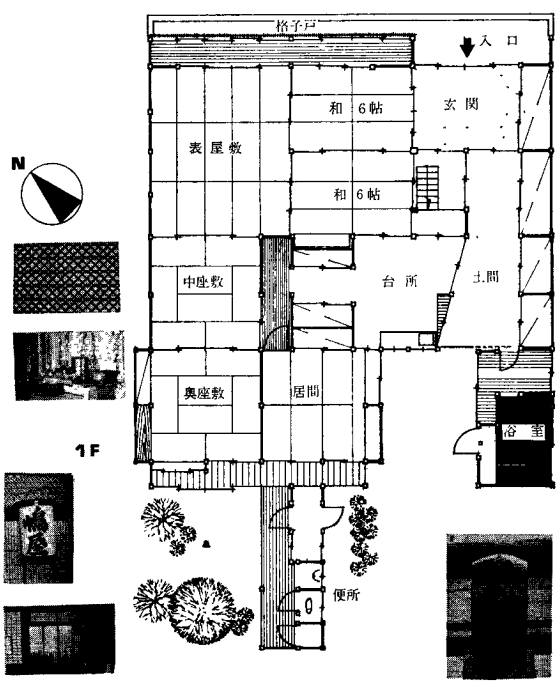


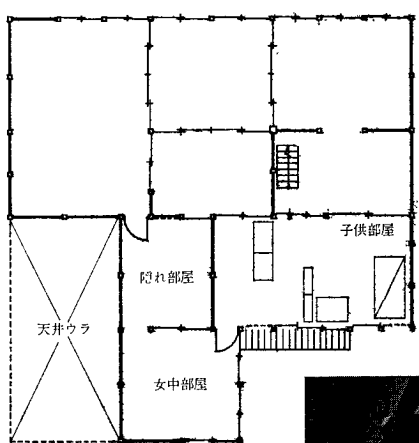


- 矢島憲三郎氏宅
- 建設年代は江戸時代中期といわれる
- 海野唯一の馬どのめある建物
- 1F 226.59㎡
- 2F 117.52㎡

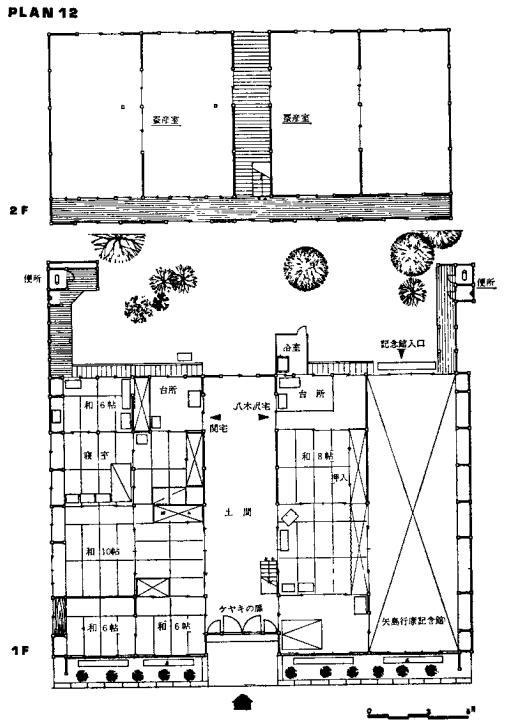


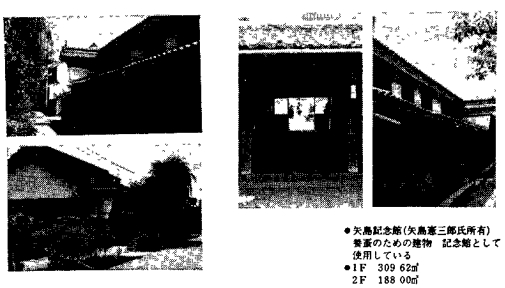
PLAN 20





- 矢島静衛氏宅
- 江戸時代志ま屋という旅籠であった
- 1F 194.56㎡
  2F 134.73㎡





●矢島記念館（矢島喜三郎氏所有）
養蚕のための建物　記念館として使用している
●1F　309.62㎡
2F　188.00㎡

スピード等の領域においても，今日の様な著しいスケールの違和感を生ずる要因となるものがなかった事などから来る道や家の間口，町並みの長さ等が統一的スケールで考えられた事など。

等々である。

9. むすび

本海野の調査は1974年が第1回であり，1977年の段階でまとめを行ったが，その間にも町並みの様相は変化し続けている。集落や都市景観の保存という事は，それらの町が現在も生き続けている以上非常にむづかしい事である。本海野の場合にしても1973年(昭和48年)文化財としての保存が決定されているにもかかわらず，建物の建て替えや，現存建物の改修等が現代風に行われてしまっている個所も多々見うけられる。したがって，今回のまとめも，今後も変化を続けて行くであろう本海野における1977年の状況報告という事で終らざるを得ない。

参考文献

長野県誌
上田小県郡誌
和村誌
建築雑誌　　日本建築学会発行

調査

1974年7月，1975年7月，1977年7月・10月

調査メンバー

川島俊厳　杉山　正　国谷和俊　山井正一（1974年）
間島修次　松原直樹（1975年）
磯村吉信　工藤芳夫　森若哲郎　町田浩行（1977年）
（国士館大学工学部建築学科卒業生及学生）

協力機関

東部町教育委員会，東部町建設課，本海野住民諸氏